第 73 回高エネルギー加速器研究機構経営協議会議事要録

日　　時　　令和４年６月１日（水）10 時 00 分 ～ 12 時 05 分

開催形態　　ＫＫＲホテル東京　孔雀の間＋ウェブ会議

出 席 者　　薄井委員、内海委員、大久保委員、國井委員、小口委員、小松委員、野口委員、
長谷川委員、東島委員、三木委員、村山委員、
山内委員、足立委員、内丸委員、岡田委員、幅委員、高橋委員、齊藤委員、
小杉委員、小関委員、波戸委員、小林委員
（欠席：西島委員）

陪 席 者　　住吉監事、辻監事、五味田総務部長、阿部財務部長、永木研究協力部長、
外山施設部長、幸田参事役・総務課長、柴沼参事役・安全衛生推進室長、
櫻井人事労務課長、横山主計課長、土田契約課長、根本決算室長、
遠藤決算・監査係長、岡田研究協力課長、山口国際プロジェクト推進室長、
佐藤施設企画課長、柴原東海管理課長、坪監査室長　他

配付資料

１．　第７期 KEK 経営協議会名簿
２．　第 72 回 KEK 経営協議会議事要録
３．　第３期中期目標期間終了時に係る教育研究の達成状況報告書（案）
　3-1.　第３期中期目標期間評価の全体像
　3-2.　教育研究に関する中期目標の達成状況報告書
４．　第３期中期目標期間終了時に係る業務の実績に関する報告書（案）
５．　職員給与規程の改正について
６．　令和３年度財務諸表、決算報告書及び事業報告書
　6-1.　令和３年度決算の概要
　6-2.　令和３年度財務諸表等（案）
　6-3.　令和３年度決算報告書（案）
　6-4.　令和３年度事業報告書（案）
７．　令和５年度概算要求について
　7-1.　令和５年度概算要求事項一覧（案）（運営費交付金）
　7-2.　令和５年度概算要求事項一覧（案）（施設整備費）
８．　加速器研究施設研究活動報告資料

議事に先立ち、山内議長から開会の挨拶があった。また、資料１に基づき児玉委員が３月31日付で経営協議会委員を辞任し、新たに４月１日付で小口委員が就任した旨の報告があった。資料２の第72回議事要録については、既に確認いただいているため確定版として配付している旨の説明があった。

議　事

１．審議事項

（１）第３期中期目標期間終了時に係る教育研究の達成状況報告書について

足立委員から、資料３に基づき説明があり、審議の結果、資料のとおり了承された。なお、内容は現時点では確定版ではなく、６月末の報告書提出までの修正については担当の足立理事に一任することで了承された。

（２）第３期中期目標期間終了時に係る業務の実績に関する報告書について

足立委員から、資料４に基づき説明があり、審議の結果、資料のとおり了承された。なお、内容は現時点では確定版ではなく、６月末の報告書提出までの修正については担当の足立理事に一任することで了承された。

＜審議事項（１）及び（２）の主な質疑応答＞

・リモートによってコロナ禍でも実験ができたことは素晴らしい。リモートの利用率はどれほどか。

→素核研では、例えばBelleⅡ実験のシフトを世界中の研究者がリモートで分担することで、職員の夜シフト負担が軽減した側面がある。ただし、現場でなければできない仕事も多い。

→物構研では、リモート実施率は分野により大きく異なるが、創薬関係では試料の自動測定などはコロナ前から世界的にもパターン化されていた。物構研でもコロナを機に試料の自動測定を利用する大学の研究者が増加し、全体の７～８割まで自動化・遠隔化が進んだ。完全に遠隔化するのではなく、来所する人数を減らしながら実験を行っているところが増えている。

→加速器では、自宅や遠隔からリモートで状況を確認することはあるが、基本は現場での対応となる。加速器の運転やトラブル対応はリモートでは難しい。

・資料 3-2 の P13 について、４年目の終了時の評価「ビームの大強度化を進めつつある」を「大強度化を実現している」に修正しようとする理由として、SuperKEKB との対比でバランスを欠くためとのことだが、事実として実現しているならば修正すべきである。

→４年目の報告書時点で既に世界最大級のビーム強度を実現していたが、このような記述で作成していた。大学改革支援・学位授与機構に確認したところ、４年目評価はこの記述で確定しているため原則変更は行わないが、修正を希望する場合は本報告書に記載するよう指示があったためこのように記載している。

・評価点の付け方、相場感はどのようになっているのか。例として、研究独法ではＳ、Ａ、Ｂ、Ｃの４段階評価であり、Ｂが標準評価で、Ａ、Ｓと評価が上がる。報告書にあるⅣはどれくらいの評価なのか。

→資料 P11 にあるとおり、１～６の６段階であり、最も良い評価が６、標準的な評価は４である。業務の実績に関する報告書の進捗状況は自己評価であり、Ⅰ～Ⅳで評価する。Ⅳは年度計画を上回って実施していることを示す。

・コロナ禍の休校児童に向けた動画とは、「Quantum Kate」のことか。

→「Quantum Kate」以外にも研究紹介等の動画も含む、休校中に児童に向けて発信した動画コンテンツ全体である。

・非常に良い取り組みであるため、今後も続けていけるとありがたい。YouTube の KEK チャンネルを確認すると、最近の動画の再生数が数百程度と少ない。分析はされているのか。

→前半の「Quantum Kate」を配信した際かなり話題になり視聴数が上がったが、第二弾で配信した後半部分がまだ浸透していないと考えている。

・寄附金の受け入れ実績について、令和３年度は 50 周年という節目で寄附が増えたと思うが、その後も継続的に寄附をいただけるような活動はしているのか。

→寄附については URA が重点的に取り組んでいるところであり、今後も継続する。50 周年は一般の方からの寄附がメインとなるため、件数は多いが一件あたりの金額は少ない。今後も関係各所と協力しながら社会へのアピールに取り組んでいきたい。

・YouTube の子供向け科学技術動画の配信や啓蒙活動など、今後理系に進む方々を育成することは重要なミッションであり、コンテンツを充実していってほしい。

・働き方改革に関連して、民間企業ではダイバーシティの切り口で身体障害者を一定数採用するよう国の指導があるが、KEK でも身障者採用の取り組みは行っているのか。

→法律に定められた障害者雇用率を遵守して採用を行っている。

（３）職員給与関係規程の改正について

内丸委員から、資料５に基づき説明があり、審議の結果、資料のとおり了承された。

＜主な質疑応答等＞

・全体の人件費にどれほどの影響があるか。労働強化に繋がらないようにする必要がある。

→人件費については大きな影響はない。KEK では加速器運転等で休日に出勤した場合に振替日が確保できないことがあるなどの現場の問題があり、本件はこれを解決するもの。労働強化には繋がらないと考えている。

・職員の有給取得状況、残業時間の平均値などについて実績はどの程度か。

→令和３年度における実績として、一人当たりの年平均休暇取得日数は、教員 6.8 日、技術職員 11.7 日、事務系職員 13.3 日となっており、一人当たりの年平均超過勤務時間数は、教員 3.6 時間、技術職員 148 時間、事務系職員 189 時間となっている。なお、教員は概ね裁量労働制適用であり超過勤務は無いが、マシントラブルによる緊急呼出し、祝

日における加速器の運転シフト（休日労働）等が該当となる。

・休日出勤や残業の増加を懸念している。ワークライフ・バランスに配慮してほしい。

（４）令和３年度財務諸表、決算報告書及び事業報告書について

内丸委員から資料６に基づき説明があり、審議の結果、資料のとおり了承された。

＜主な質疑応答等＞

・設備や機械装置の老朽化を懸念している。今後工夫しながら設備更新を進めてほしい。

→ご指摘の点については、特に安全関係の設備の更新を進めている。ドミトリーについても老朽化が進んでおり、昨年度末に新棟として５号棟を竣工した。今後も関係各所と協力しながら努力したい。

（５）令和５年度概算要求について

内丸委員、幅委員から、資料７に基づき説明があり、審議の結果、資料のとおり了承された。

＜主な質疑応答等＞

・令和５年度の要求において、電気代の高騰分については含まれているか。

→現時点において明確な指示が文科省から来ていない。今後の補正予算成立の動き等、国全体の動向に注目しつつ、大学全体のコミュニティの中で考えていくことの必要性について議論されているのが現状である。

２．報告事項

（１）KEK-PIP2022 について

山内議長から、KEK-PIP2022 の概要について報告があった。

３．研究活動報告及び自由討論

小関委員から資料８に基づき説明があった。その後、質疑応答及び自由討論が行われた。

＜主な質疑、発言等＞

・J-PARC のビームの増強が 1.3MW を実現した場合、ターゲットの耐久性は問題ないのか。

→ビーム強度 1.3MW は、ターゲットの耐久性能内に収まっている。

・SuperKEKB について、バックグラウンドノイズが厳しいと聞いているが今後の見通しはどうか。

→ルミノシティ向上が遅れている要因のひとつがバックグラウンドノイズの大きさであり、様々な方法でこれを下げることが必要である。ノイズにつながるビームハローをカットしていくことが重要であり、新しいコリメータを長期シャットダウン（LS1）で導入する予定でいるほか、ノンリニアコリメータという新しいスキームを導入することでバックグラウンドの低減を図りたい。その他、検出器サイドのシールドも重要と考えている。

・次世代光源加速器の R&D はどういう位置づけで行っていくのか。

→次の中期計画の６年で建設が可能になるよう、この６年でR&Dを進めていくことを考えている。

・人件費について、損益計算書中で２億円程度削減されているが、事業報告書内の教員数は前年度比で５人増えており、平均年齢も変化がない。どのような要因で人件費を削減できたのか。

→様々な工夫で人件費の削減を行っている。この６年間で人件費は毎年１％ずつ削減されており、数字上にはこの削減も含まれている。また、クロスアポイントメントを活用している。

山内議長から、次回の経営協議会について、令和４年12月20日（火）10時から開催予定との案内があり、閉会した。

以 上